

# 倭寇研究と授業を結ぶ

大磯高校 中田 稔

## はじめに

倭寇は、「倭寇<sub>二</sub>金州<sub>一</sub>」（1223）という『高麗史』の記事にはじまる。特に14世紀なかば（庚寅年＝1350）以降、（高麗末から朝鮮初期にかけて）倭人の朝鮮半島侵寇が日常化する中で、「倭寇」の二文字は成句となる。朝鮮王朝が成立すると、「倭寇」の鎮圧と懐柔が対日外交の最重要課題となり、その対応は15世紀の日朝通交体制（三浦、文引、癸亥約条等）確立につながり、時に己亥東征（応永の外寇。1419）や三浦倭乱（三浦の乱。1510）のような武力鎮圧もあった。

倭寇研究は、1980年代以降の日本においては、「海域アジア史研究」として歩み続けている。「日本の」「韓国（当時は朝鮮王朝）の」などといった今日の国家という枠組みを外し、その境界地域（海域）での人やモノの移動・交流を検討する中から当時の地域像、時代像、国家のあり方等を明らかにしようという姿勢である。そのような変化にもかかわらず、日本史B教科書における倭寇の記述は、管見の限りでは、教科書による差異が大きく、旧説に基づくものも多い。

本報告は、まず日本における戦前からの倭寇研究を簡単にたどり、現在使用されている数種の日本史B教科書にみられる倭寇関連記述を、研究史とつきあわせて検討する。さらに、倭寇の問題を含む14～16世紀の対外関係を授業であつかう際の視点について、授業で投げかける「問い」を倭寇研究の成果をヒントに提案する。

## 1. 倭寇研究のあゆみと現状

日本における倭寇研究は19世紀末にはじまり、すでに100年を超えている。特に、明治末に韓国を保護国とし、『朝鮮王朝実録』など朝鮮王朝側の史料が閲覧可能になると研究は飛躍的に進展し、アジア太平洋戦争が近づくとつれ、海外膨張を追求する時代風潮もあって盛んになった。

そのような戦前においても、大正期の三浦周行は倭寇の鎮圧と日朝通交をめぐる基本的な論点を明らかにし〔三浦周行 1922〕、昭和戦前期の秋山謙蔵によって「前期倭寇」と「中国人無頼の徒」による「後期倭寇」の別が明らかにされ〔秋山謙蔵 1934〕、朝鮮総督府朝鮮史編修会の嘱託で修史官と編修官を歴任した中村栄孝が個別の論点を深める論考を次々に発表するなど、戦後の研究につながる実証的な研究も盛んに行われていた。

戦後は対外関係史研究が沈滞する中で、中村栄孝が日朝通交をめぐる諸問題について戦前からの研究をまとめ〔中村栄孝 1965 - 1969〕、田中健夫は前期倭寇についての原因（高麗側の退廃も）・目的（米豆・奴婢獲得）・地域（三島＝対馬・壱岐・松浦）・構成要因を解明した上で、朝鮮王朝になると懐柔策により様々に変質するとした〔田中健夫 1959〕〔同 1961〕〔同 1975〕。田村洋幸は倭寇の活動を時期区分し、倭魁・倭寇の構成員について「麗末（報告者注；高麗時代末期）の倭寇はむしろ朝鮮人が主10人中8・9人までは朝鮮人であったと認識されていた事実」を指摘した〔田村洋幸 1967〕。

1980年代以降、一国史＝ナショナルヒストリーへの批判が高まると研究者の数が増え、研究もさまざまに展開する。ここでは、そのポイントを3点指摘する。

第一は、倭寇の主体をめぐる論争である。先述の田村洋幸の論考で大きな波紋は広がらなかったが、田中健夫が高麗人主体説〔田中健夫 1987〕、高橋公明が濟州島の海人説〔高橋公明 1987〕を提唱すると、李領は日本人主体であることを強く主張し〔李領 1999〕、いわゆる日韓の歴史問題の一角ともな

った。村井章介は、田中・高橋両氏の意見に慎重な立場をとりつつ、倭寇の実態を「マージナルマン（境界人）」として位置付け〔村井章介 1993〕、これが日本の研究者の共通理解になりつつあるようだ。

第二は、海域アジア史という研究視角の登場である。村井氏らが提唱した、今日的な国境を外した境界地域・海域の研究〔村井章介 1988〕の一方、地域と地域・地域と国家との関係の研究がすすんでいる（〔長節子 1987〕〔佐伯弘次 1999〕〔同 2003〕〔関周一 2002〕〔須田牧子 2011〕などがある）。さらに村井章介は、「マージナルマン（境界人）」が活動する「倭寇的状况」「倭寇的世界」を解明している〔村井章介 2013〕〔同 2014〕。

第三は、偽使研究の進展である。偽使とは、実際の派遣主体と名目上の派遣主体が異なる偽物の外交使節のことで、14世紀から16世紀にかけて横行したことが次第に明らかにされた。貿易の利益を求めて使節を偽造する勢力や、偽使の実態解明が次々にすすんでいる〔長節子 2002〕〔伊藤幸司 2005〕〔荒木和憲 2007〕〔橋本雄 2005〕〔同 2012〕。

## 2. 倭寇関連の日本史B教科書記述

歴史研究と歴史学習をつなぐのは、歴史研究者が中心となって執筆される教科書である。ここでは平成27年度用見本本の中から『高等学校日本史B』（清水書院。以下①）・『新日本史B』（山川出版社。以下②）・『高校日本史B』（実教出版。以下③）・『新選日本史B』（東京書籍。以下④）・『詳説日本史B』（山川出版社。以下⑤）・『日本史B』（実教出版。以下⑥）の6冊を利用し、倭寇に関連づけられる14世紀から16世紀の対外関係部分の記述について、気づいたことを略述したい。

大まかな傾向として、旧説による記述がいまだに目立つことと、教科書による差異が大きいことを強調したい。

旧説で記述されている例としては、大内氏の滅亡とともに後期倭寇の活動が活発化したとする⑤（後期倭寇活発化の原因は、日本銀の流通による海域通交の活発化に求めるのが今日の見解。②のように、大内氏の滅亡により通交がとだえたとするのであれば正しい）があり、⑥は前期倭寇～日明貿易～後期倭寇という旧来の流れで記述している。また⑥は、日朝交易には「通信符」が用いられたとするが、語句の用い方が適切かどうか、報告者には大いに疑問である（詳細は、本報告3. のvi）。

現在までの研究成果を積極的に取り入れている教科書としては、まず①があげられる。側注ではあるが、倭寇の主体にふれたところで、当時の「国籍」に現代の尺度を持ち込むことを否定した部分は注目できる。しかし、「倭寇的世界」「倭寇的状况」といった用語を高校生にどのように説明するかは難題かもしれない。②は、三浦の乱が起こり大内氏が滅亡した後は「対馬の宗氏が『日本国王使』をはじめ、多様な名義を用いて、ほぼ独占的に通交した」と記述し、偽使の存在を暗示している。また②は日明・日朝外交における禅僧の役割を強調するために、禅僧の活動を（北山文化・東山文化ではなく）対外関係のすぐ後に記述しているのも面白い。

倭寇対策としての日朝通交は経緯が複雑ゆえ内容の選択が難しいので、教科書によりまちまちである。ここでは、一定量の記述が必要になることだけを指摘したい。

いうまでもなく教科書は学習指導要領に則って編修されるが、執筆を担当するのは主に大学の研究者である。したがって、対外関係史の専門家が執筆に参加している教科書こそ、現在の研究が生かされていると想像される。①はその例であるが、教科書には現場で使用する教員の要望も反映されるので、馴染んでいる知識＝旧説をもとに記述した教科書の方が「安心感がある」ゆえ、旧説がなくなりにくいことも事実である。論点がずれるので深入りはしないが、現場の教員が、歴史研究の現況に関心を払い、自己研修を十分に行う時間の余裕がほしいと考えるのは報告者だけではないだろう。

### 3. 倭寇を授業であつかう視点

それでは、実際に授業で倭寇関連の事項を扱う際のヒントになるような「問い」について、研究史をヒントに、紙幅の許す限り提案したい。

#### i) 倭寇に対する認識 — なぜ、実際より大きく描かれているのか？

本研究報告集第 37 号で紹介したように、15 世紀後半に朝鮮で刊行された日本ガイド『海東諸国紀』は、日本を知り日本からの使節を接待するためのマニュアルともいえる書籍である。その冒頭にある、印刷されたものとしては最古の日本地図である「海東諸国総図」をみると、対馬と壱岐がひときわ大きく描かれていることがわかる。一方、16 世紀後半に明で刊行された日本ガイドである『籌海図篇』に載る日本図は、五島列島がひときわ大きく描かれる〔村井章介 2004〕。いずれも倭寇の根拠地とされ、関心がきわめて高かった場所である。

#### ii) 倭寇の主体にかかわり、当時の人物の国籍を考える — 以下の人々は何人か？

倭寇も、海域世界に生きる人々に含まれる。そのような人々のうち、次の 3 人の国籍を考えさせることで、倭寇の主体の国籍を、今日の国境を基準に考えることの問題性に気づかせたい。

一人目は、本研究報告集 34 号で紹介した蔚山出身の朝鮮王朝の官人李藝である。幼いころに母を倭寇にさらわれ、蔚山の吏であった 25 歳の時に上司（蔚山郡守）が倭寇により対馬に連行された際これを追って対馬へ渡り、上司と共に無事帰還。これにより、科挙を受けていないにもかかわらず官職を得、多くの被虜を対馬・壱岐・松浦から朝鮮に送還し、使節として京都や各地の守護大名を訪れ、外交活動をおこなった。その一方李藝は博多商人の貿易にも加担しており、特に銅貿易の最中に尾道で海賊に襲われ大内氏に保護されている。さらには、乗船が遭難して石見に漂着したり、朝鮮王朝の官人として唯一の琉球使行を成し遂げ被虜多数を刷還したりと、李藝の活動地域は朝鮮半島から西日本・琉球までの海域すべてに及ぶ。晩年は高官として、文引制度や癸亥約条など、対馬と朝鮮王朝の間の通交体制をつくり上げた〔中田 2008〕。ここまでにたびたび登場する村井章介氏は「使節として相手国に赴くという実務担当者のレベルで、15 世紀前半の日朝外交を彩った」官人であり、その活動地域から「境界人の性格が濃い人物だった」と評価する。

二人目は、「倭人」平道全である。生まれは対馬で、島主宗貞茂の使者として朝鮮を訪れ倭寇の俘虜を送還し、帰化を願い出て許され、官職を受け、対馬との交渉を担う外交官としても活動した。つまり平道全は対馬島主が朝鮮王朝に埋め込んだ外交チャンネルであり、朝鮮王朝にとって対馬の情報源であった。道全がつくった船と朝鮮の兵船を競争させたという記録からは、造船技術を持ってもいた。琉球渡航の経験があると読み取れる記録もある。応永の外寇の際に戦場に送られるが、ひそかに対馬に通じ他人の功を盗んだという嫌疑をかけられ、妻子共に平壤に流刑となった〔松尾剛毅 2014〕。

三人目は「倭人」金元珍である。民族的には朝鮮人だが、対馬や北部九州の勢力の使者として度々朝鮮を訪れている（1419～）。やがて琉球通事として、琉球から朝鮮への外交文書を携え渡航し、互いの漂風者の送還を取り決める。帰途、平戸に向かう際、朝鮮に抑留された平戸人ら 20 人を送還した（1430）。その 5 年後に「肥州太守」（松浦党？）の使者として朝鮮に渡航、朝鮮の島で船材の伐採許可を求めた（認められなかった。1435）。このように金元珍は、朝鮮・琉球・平戸間の外交の媒介者であった〔村井章介 2006〕。

今日の国境で区切ると、平道全は日本人で金元珍は韓国人（朝鮮人）である。この 2 人がともに「倭人」と呼ばれていることに注目したい。朝鮮王朝官人の李藝も含め、3 人の活動地域はほぼ重なる。

国境海域で活動し、特に朝鮮王朝側から「倭人」と呼ばれる類型の人々を、出生地や今日の国境によって区別することは、やはり適切ではないだろう。

### iii) 後期倭寇の構成員 — 後期倭寇は日本人だったのか？

本報告集にある須田牧子氏の講演にあるように、近年中国では、鎮倭の顕彰絵図として、複数の倭寇図が発見されている。有名な『倭寇図巻』に描かれた倭寇は日本人の姿をしているが、『明史』など文献資料からは、後期倭寇は中国人主体であったとされる。『倭寇図巻』の制作意図は、鎮倭を誇示することにあつたから、倭寇の姿は日本人でなければならなかった。近年発見された倭寇図のなかには、中国人の様態で活動しているものもあり、興味深い〔東京大学史料編纂所 2014〕。「後期倭寇は日本人だったのか」は、『倭寇図巻』という史料について考えさせる上では面白い問いであるが、それをもって後期倭寇の民族性にこだわることには慎重でありたいとおもう。

### iv) 後期倭寇の出現時期 — 後期倭寇はなぜ 16 世紀前半に出現したのか？

旧来は、大内氏滅亡により後期倭寇の跳梁が盛んになったとされたが、近年は日本銀（石見・生野）産出が盛んになった 1530 年代から、あらたな物産の流通に目をつけた密貿易商人の活動が活発化して海域の通交が増え、鉄砲もそのような状況の中で日本列島にもたらされたという見解が定説になりつつある。16 世紀前半の外交・貿易の詳細を年表として生徒に提示し、後期倭寇出現の背景を考えさせることは可能なのではないか。

### v) 偽物の外交使節〈その 1〉 — 勘合は、何のために用いられたか？

勘合は外交使節（遣明使）と倭寇を区別するためのもの、というのは大概の教科書に記されるが、このような問いを思いたったきっかけは、たまたま報告者の目にとまった 2012 年北海道大学の入試問題である。その一部を引用する。

「……なお、室町時代の日朝関係において施行された〔エ〕（報告者注：解答は勘合）を、正規の遣明使と倭寇との区別をつけるためのもの、と説明することがあるが、正確には〈正規の使節と偽物の使節とを区別するためのもの〉というべきであろう。……」

報告者も、倭寇（海賊、掠奪者）と外交使節（遣明使）の区別をするためにあのような勘合が必要だったのかという素朴な疑問を抱いていた一人であるが、この一文で疑問は氷解した。

偽物の使節＝「偽使」とは、「第三者が、貿易利潤を獲得するために、ある人間（実在しなくてもよい）の名義を騙ることで外国に通交した偽りの外交使節」〔橋本雄 2005〕をいう。利用された名義としては、「日本国王」（幕府将軍）、「王城大臣使」（管領など幕府の首脳）、「巨酋」（守護大名）、「琉球国王」ほかがある。朝鮮王朝は、日本国王など派遣主体の格に応じて接待の規模を変えたので、格が高い偽使ほど大きな利益が期待できた。

日明間では 14 世紀後半に最初の偽使が送られていた。1369 年に明皇帝が、「良懐」（懐良親王）に倭寇禁圧を要求し、やがて「良懐」を日本国王に冊封すると、「日本国王良懐」名義の偽使が数回明に派遣された。派遣主体は、島津氏や九州探題であったとされる。1401 年以降足利義満が明皇帝の冊封を受け、いわゆる勘合貿易を開始するが、勘合を用いていたのは偽使と区別するためという上記の説明には説得力を感じる。偽物を「なりすまし」という言葉に置き換えれば、生徒にも親しみやすいのではないだろうか。

## vi) 偽物の外交使節〈その2〉 — なぜ、偽物の外交使節が急に増えたのか？

偽使は、日朝間では1397年の「源了俊」(九州探題今川了俊)の使節が最初とされる(今川了俊は、1395年に九州探題を解任されている)。15-16世紀の日朝通交では、頻繁にみられることが次々に明らかになっている。偽使を学ぶためには、室町期の日朝通交(倭寇に対する朝鮮王朝の対応でもある)の推移を押さえる必要がある。

冒頭でふれたとおり、朝鮮王朝の対日政策の根本は倭寇勢力の懐柔と禁圧であったから、平和的に通交する者に対しては授職といって朝鮮王朝の官職を与え定期的に朝貢させたり(受職倭人)、図書(私印)を与えて使節として朝貢させたりした(受図書倭人)。1400年ごろから対馬情勢が宗氏の本家によりほぼ安定すると、島主宗貞茂の協力によって倭寇は減少するが、貞茂が没して倭寇が増加すると、朝鮮王朝は対馬に武力侵攻を行う。これが応永の外寇(朝鮮では己亥東征)で、1419年のことであった。以後、朝鮮王朝は日本に使節を派遣(回礼使・通信使。1422-1443)し、日本の様々なレベルの勢力から朝鮮王朝に多くの「使節」=通交者が渡った。これら通交者の接待により朝鮮王朝の財政は圧迫され、通交者は様々な手段で制限される。日本船の来航を三浦(富山浦・齋浦・塩浦)に限定したり(1426)、通交者に文引(対馬島主が発行する朝鮮への渡航許可証)の携帯を義務づけたりしたが、効果はなく、通交船はむしろ増加した。

そこで朝鮮王朝は、通交できる船舶の総数を制限する。毎年50隻の対馬島主宗氏の歳遣船のみの通交を定めた癸亥約条(1443)がそれであったが、対馬の勢力はしたたかである。特送船といって、歳遣船の例外規定を設け、対馬島主が島主以外の有力者の通交船派遣を申請したのだが、偽使の派遣も通交制限への対抗手段であった。しかし、やがて本物の日本国王使によって前年の日本国王使が偽使であったことが発覚するや(1471)、朝鮮王朝は偽使と判別するために「日本国王使」「王城大臣使」に10枚の牙符を与えた。牙符は「円周が四寸五分の円形の象牙一〇枚を半折した」もので、「片面に〈朝鮮通信〉と篆書され、裏面に〈成化十年甲午〉と記されて」おり、「第一から第十の番号が付けられ」「朝鮮側に左符、日本側に右符が分配」された〔橋本雄 2005〕ことから、通信符とも呼ばれてきた(したがって、ここまでの日朝通交の経緯に鑑みれば、「日朝通交は通信符により行われた」とするのは誤りではないが、適切とは言えない)。

16世紀に入ると、通交を統制する朝鮮王朝に対して三浦に居住する倭人が暴動(三浦の乱)を起こし、歳遣船は50隻から半数以下に縮小される。対外的関心が薄れていた朝鮮王朝から日本に使節は派遣されず、朝鮮への「日本国王使」は対馬と博多の勢力による偽使であったとされる。

豊臣秀吉による侵略の後、江戸幕府が成立すると17世紀に対馬藩家老柳川氏による国書の書き替えが発覚するが、同様のことは14世紀から続いていたのである。

## おわりに

マージナルマンである「倭寇」の実態はまだまだ分からないことが多いが、貿易商人としての顔、偽使としての顔、活動地域、さらに14世紀日本列島で「悪党」と呼ばれていたアウトローたちのことを考えると、今日とは様相が大きく異なる中世日本のかたち(国家の在りよう)が浮かびあがる。

そのような時代を生徒が理解するには、ドノヨウナ工夫が必要だろうか。本報告は、授業の取っ掛かりにできそうな「問い」を提示しただけで終わってしまった。限られた時間内で扱う内容の精選・生徒が行う考察・生徒間の討論の題材として何が適切かを検討すること等、課題は尽きない。

《参考文献》(本文登場順。末尾2冊の論考は本文では取り上げなかったが、参考になる)

- 三浦周行『日本史の研究』第1輯 岩波書店 1922
- 秋山謙蔵「支那人の倭寇」『歴史地理』第63巻第5号 1934
- 中村栄孝『日鮮関係史の研究』(上)(中)(下) 吉川弘文館 1965 - 69
- 田中健夫『中世対外交渉史の研究』東京大学出版会 1959
- 田中健夫『倭寇と勘合貿易』至文堂 1961
- 田中健夫『中世対外関係史』東京大学出版会 1975
- 田村洋幸『中世日朝貿易の研究』三和書房 1967
- 田中健夫「倭寇と東アジア通交圏」朝尾他編『日本の社会史1 列島内外の交通と国家』岩波書店 1987
- 高橋公明「中世東アジア海域における海民と交流」『名古屋大学文学部研究論集』史学33 1987
- 李 領『倭寇と日麗関係史』東京大学出版会 1999
- 村井章介『中世倭人伝』岩波新書 1993
- 村井章介『アジアの中の中世日本』校倉書房 1988
- 長 節子『中世日朝関係と対馬』吉川弘文館 1987
- 佐伯弘次「室町後期の博多商人宗金と東アジア」『史淵』136 1999
- 佐伯弘次「室町後期の博多商人道安と東アジア」『史淵』140 『史淵』140 2003
- 関 周一『中世日朝海域史の研究』吉川弘文館 2002
- 須田牧子『中世日朝関係と大内氏』東京大学出版会 2011
- 村井章介『日本中世境界史論』岩波書店 2013
- 村井章介『日本中世の異文化接触』東京大学出版会 2014
- 長 節子「朝鮮前期朝日関係の虚像と実像 ―世祖王代瑞祥祝賀使を中心として―」  
『年報朝鮮學』8 2002
- 伊藤幸司「日朝関係における偽使の時代」第1期日韓歴史共同研究報告書第2分科篇 2005
- 荒木和憲『中世対馬宗氏領国と朝鮮』山川出版社 2007
- 橋本 雄『中世日本の国際関係 東アジア通交圏と偽使問題』吉川弘文館 2005
- 橋本 雄『偽りの外交使節』吉川弘文館 2012
- 村井章介「韓中の絵地図に描かれた日本列島周辺」吉田光男編『日韓中の交流』山川出版社 2004
- 中田 稔「朝鮮初期における朝鮮人官人の対日活動 ―世宗代までの李藝を中心に―」  
東京学芸大学大学院『学校教育学研究論集』第17号 2008
- 村井章介「一五世紀日朝外交秘話 ―李藝と文溪正祐―」『立正史學』第115号 2014
- 松尾剛毅「朝鮮王朝の日本人官吏・平道全」佐伯弘次編『中世の対馬』勉誠出版 2014
- 村井章介『境界をまたぐ人びと』山川日本史リブレット 28 2006
- 東京大学史料編纂所『描かれた倭寇 「倭寇図巻」と「抗倭図巻」』吉川弘文館 2014
- 村井章介・荒野泰典「地球的世界の成立」荒野・石井・村井編『日本の対外関係5 地球的世界の成立』  
吉川弘文館 2013
- 村井章介「倭寇と日本国王」荒野・石井・村井編『日本お対外関係4 倭寇と日本国王』  
吉川弘文館 2010